

【ポスター発表】

特別養護老人ホーム入居者家族への支援方法

- 迷いの緩和をめざして -

大妻女子大学 井上修一 (4124)

特別養護老人ホーム、入居者家族、迷い

1. 研究目的

これまでの研究によって、入居者家族は、身内を施設に預けることに伴って次のような迷いを抱えることがわかった。預けることへの後ろめたさや罪悪感、面会に行くことの躊躇、入居者（身内）への関わり方の不安、入居者（身内）の変化に対する悲しさと戸惑い（井上 2010：11-20）。入居者家族は、自分の身内を施設に預けたことによって苦悩や葛藤等を抱え、その感情を表現する機会が少なく、あったとしても不十分であるということが指摘されている。さらに、面会などを通してそれらの感情が全て解消されるわけではなく、継続される場合があること。苦悩や葛藤等の感情が継続される背景には、その感情自体を家族が表出する機会が乏しいこと、それらの感情を緩和する取り組みが意識的に行われていないことが伺える。そこで本研究では、身内を施設に預けたことに伴って派生する複雑な感情 = 迷いの姿を明らかにし、分析可能なものとしながら、迷いの緩和に結びつく支援方法の提示をめざした。

2. 研究の視点および方法

入居者家族の支援においては、「当事者を支える家族」という視点だけでなく、家族自身が抱える「罪悪感」、「後ろめたさ」、「引け目」、「関わりへの不安」、「身内の変化を受け止めることの難しさ」など、入居者家族が抱く迷いの感情を吐露する機会を意識的に提供することが求められる。これまでの研究によって、入居者と家族がよりよく向き合い、適切な関係を継続するためには、入居者家族自身が抱く感情の吐露、入居者への思いの傾聴と受容、入居者自身の普段の様子を援助者が把握して家族に伝えることが極めて効果的に働くということが示唆された（井上 2010：19-21）。さらには、家族会の活動内容を家族同士のサポート活動として展開していくことが有効と考えられた。

本研究の調査対象は、G県内の特別養護老人ホームで、当方の調査に対して協力の意思のあった施設（4カ所）の家族24名である。それぞれの家族は、施設の家族会に参加し、月1回以上入居者と関わっている方をお願いした。調査時期は、2009年9月20日～2010年3月14日までの間の4日間である。インタビューの時間はアンケート調査を含め120分程度とした。研究方法としては、入居者家族に対するグループインタビュー法を採用した。さらにインタビューの前後で、STAI（状態 - 特性不安尺度）の日本語版を用いてアンケートを実施し、入居者家族の心理状態の変化を測定した。ここでは、特に入居者家族が

身内とかかわる際の不安（「関わり方の不安」）の軽減が図れるかどうかを評価するため STAI を用いた。グループインタビューでは、これまでの研究で明らかになった(1)「入居者家族が抱く迷い」について、(2)「入居者家族への支援方法」について、(3)職員とのかかわりで安心したことを尋ねた。家族同士の発言を促し、体験や感情の共有を図ることで、身内に関わる際の不安が軽減できると考えた。

3. 倫理的配慮

入居者家族に本研究の同意を得るにあたって、調査前に研究の趣旨、研究結果の活用、秘密保持等について説明したうえで依頼した。調査票は無記名で行い、インタビューの際は、それぞれに番号を割り当てたうえで行った。調査後は研究結果を施設の担当者（生活相談員・施設長）等に送付し、フォローアップを依頼した。

4. 研究結果

入居者家族の状態不安・特性不安について、グループインタビュー前後の比較を行った。その結果、状態不安の不安得点は、グループインタビュー実施前 43.4 に対して実施後 39.6 で有意差がみられた ($t=3.24, df=18, p<.01$)。調査によって、家族同士がお互いの心情を語り合うことが、状態不安を軽減する可能性を示唆する結果となった。

施設ケアにおける家族支援は、援助者からの支援だけでなく、家族同士のささえあいの効果も視野にいれる必要がある。家族会に参加していても家族同士の情報交換、相互支援の場として家族会の活動が十分に深まらない場合があるため、グループインタビューを通じて迷いの共有や解消がなされるのではないかと考えた。

面会に来ていても他の家族と話したことがない家族やグループインタビューが良い機会であったという家族がいる。さらには、家族同士のつながりを求める発言もある。施設に家族会があっても入居者家族同士が顔を合わせて話をする機会は必ずしも多くない。今回のグループインタビューによって家族同士が話し合う機会を持ち、自分だけが悩んでいるのではなく、周囲にも同じ思いを持っている人がいるという、関係の深まりを実感することができた。このことから、家族会が家族同士のサポート活動としてさらに発展できると推察された。入居者家族の支援においては、「当事者を支える家族」という視点だけでなく、家族自身が抱える「罪悪感」、「後ろめたさ」、「引け目」、「関わりへの不安」、「身内の変化を受け止めることの難しさ」など、入居者家族が抱く迷いの感情を吐露する機会を意識的に提供する必要がある。今後、入居者と家族がよりよく向き合い、適切な関係を継続するためにも、家族会の活動内容を家族同士のサポート活動としてさらに発展させていくことが重要となる。

【文献】井上修一（2010）「特別養護老人ホーム入居者家族が抱く迷いと緩和に関する研究」『人間関係学研究』（大妻女子大学人間関係学部紀要）12、11-26。